

週刊センターニュース

No.234



第234号(2008年11月17日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第5回専門分野別教育開発セミナーのご案内 ○●○

主催: 金沢大学 大学教育開発・支援センター

共催: 金沢大学理工学域、後援: 日本化学会

日時: 11月22日(土) 13:30-17:50

会場: 金沢大学角間キャンパス自然科学系図書館棟大会議室

テーマ: 「分子のミクロな世界をいかに理解させるかー化学分野 FD モデルの構築に向けてー」

プログラム: 講演 (13:40-16:20)

関谷 博 (九州大学理学研究院化学部門教授)

「量子化学の基礎理論と分光実験による分子科学の理解」

中垣 良一 (金沢大学医薬保健研究域薬学系教授)

「元素の周期律と量子論」

猪股 勝彦 (金沢大学理工研究域物質化学系教授)

「有機合成化学と分子構造」

議論 (16:35-17:40)

・参加申し込み先: 西山宣昭 (大学教育開発・支援センター)

e-mail: nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp

・18時より、自然科学系図書館棟すみれ亭にて会費2000円で行います。情報交換会の参加申し込みは、上記のセミナー参加申し込みの際、合わせてお願いいたします。なお、会費は当日セミナー受付にていただきます。

○●○ 第206回共同学習会のご案内 ○●○

日時: 11月27日(木) 午後4時30分~午後6時

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階 大会議室

テーマ: 「フンボルト理念の終焉? —現代大学の新たな次元(潮木守一著)を読む」

報告者: 渡辺 達雄 (大学教育開発・支援センター)

趣旨: 近代大学の成立を知る上でフンボルト理念を避けることはできないが、時代の流れと社会状況により、教育を疎かにし研究至上主義を唱えるものという誤解が生じている。フンボルト理念を再吟味した本書を読み解きながら、大学の原点を考えるための有効な材料とするとともに、本学「ベスト10への道程 学長のアクションプラン(案)」【1.教育】において、「現代的意味でのフンボルト型教育」が軸とされており、金沢大学が構築できる教育と研究のスパイラルの姿はどうあるべきかについて、参加者とともに議論していきたい。

○●○ 結びつく教職員－教育力、学士力をキーワードに－ ○●○

(前号より続き)

こうした地域の連携に加えて、答申案に盛り込まれているように、各専門分野内での教育力充実のための取組が強力に進められようとしている。センターニュースでも、大学教育学会や高等教育学会等の学会の活動を紹介すると同時に、専門分野の例として日本医学教育学会のことを再三採りあげてきた。教員はそれぞれの学会で研究についてお互いに情報交換・情報共有を行い、切磋琢磨するなかで、真理の探究という道を孤独ではあるが一緒に歩んでいることを体験している。実は、教育においても同様である。自分一人だけで教育しているわけではない。教職員全員で学生を育てているのであり、そのために有効な技術を身に着けるためには、研究が必要となる。

一方で、近時の急速な動きに対しては、郷学長は上記論文で「文部科学省は、日本学術会議に対して分野別質保証の枠組みづくりについて審議依頼を行った。今後数年にわたって同会議で議論が行われる見込みである」と紹介した上で「そのアウトプットが過度に専門的で細分化された内容の教え込みを促すものになってしまってはならない。それでは、学部・学科の縦割りの壁を一層強固にしてしまう恐れが大きい。知の統合、総合化を志向する『学士力』の考え方を十分に踏まえた、有意義な成果が生み出されることを期待したい」とくぎを刺している。専門教育研究が学士課程教育全体を見据えた上で行われねばならないという意味で、当然の指摘である。当センターは今年 22 日に化学分野でのFDセミナーを開催するが、この文脈を踏まえてのものである。

ちなみに、今日の日本の学士課程教育における問題点を教育力の観点から分析した、金子元久・東京大学大学院教育学研究科科長の『大学の教育力』（ちくま新書、2007 年）著書についても、センターニュースや共同学習会で紹介してきたとおりである。実はそこでも、共通教育・教養教育の重要性が説かれていた。上記審議会の委員でもある金子氏の教育力重視という考えは、『IDE 現代の高等教育 505 号 学士課程教育答申案を読む』では、学士力との二者択一的な見方も可能な如く紹介されているが、私は答申案にも沿うものであると私は理解している。それは、教育力を高めるためには教職員相互がつながりあう必要があり、結果として学士力が伸びるということが期待できると考えるからである。この二つのキーワードを念頭に置きながら、大学のあり方を見つめることを続けるべきと考える。

(文責：教育支援システム研究部門 青野 透)

○●○ 追記とお詫び ○●○

センターニュース 232 号の記事「各大学における卒業生の質を保證するシステム」で取り上げました山口大学および三重大大学のそれぞれの事例説明について、典拠を明示しておりませんでした。

山口大学の「TOEIC を活用した英語教育」は、山口大学 大学教育センターHP

(<http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/>) 上のお知らせで、「平成 16 年度「特色ある大学教育支援プログラム」TOEIC を活用した英語カリキュラム 教育の水準保証と学習支援」(PDF)の概要部分より、また「グラデュエーション・ポリシー」等に関しては、山口大学大学教育機構論集『大学教育』3 号の、沖裕貴・田中均論文「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」(39-55 頁、2006 年)にもとづき記述致しました。同様に、三重大大学の「4つの力」等についての更に詳細な内容は、三重大学高等教育創造開発センターHP (<http://www.hedc.mie-u.ac.jp/>) にある「4つの力アンケートに関する案内ページ」より、「4つの力に関するアンケート調査についての説明～平成 19 年度実施の自由記述から～」(PDF)にもとづき記述を行いました。追記するとともに、お詫び申し上げます。

(文責：評価システム研究部門 渡辺 達雄)